

---

# 遊戯王GX-お気楽小僧の決闘者生活-

時金 成

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王GX―お気楽小僧の決闘者生活―

### 【Nコード】

N2048Y

### 【作者名】

時金 成

### 【あらすじ】

友人宅に泊まり込みで遊んだ翌日、友人宅の居間で起きた俺……高峰 勝利は遊戯王の世界にやってきていた。友達もかと思ったら、まさかの俺だけっ!?

持ってこれたのは圏外の携帯に遊戯王のデッキが9つとPSPと財布……あ、家はちゃんとあって良かった。と思ったら、亡くなったはずの両親が生きていた!?

と、よくよく体を確認すればなんか縮んでるし！？ え、高校受験？ 遊戯王の世界に來たんならやっぱあそこっしょ！

これは決闘者として有名になり親孝行を目指すぽっちゃりとした少年の話。

## TURN-00【目覚めたら異世界に】

クリスマスイヴ……俺、高峰 勝利は友人の家に泊まり掛けで遊びに来ている。互いに彼女なんてものはおらず、男二人だけの寂しいイヴだ。何をしているかと言うと。

「速攻魔法サイクロンを発動。俺から見ても一番右のカードを破壊」

「チェーンして呼び声を発動。クリッターを持ってきて呼び声破壊。クリッターの効果で顔を持ってきて、ほれ」

「くわあ、また負けた」

遊戯王カードをやっている。友人は最近新たに組み立てたエグゾデシアデッキを使っていて、俺は連敗している。守りのカードが充実していて攻めきれないでいた。もう、やっぱりあのデッキじゃないと駄目か。

「もう一回！ 今度はこれ使うから」

「ふあ、いや、それ何回目だよ。いい加減こっちは眠くなってきたからもう明日にしろよ」

「くっ、勝ち逃げは許さんからね」

もう午前三時過ぎ。俺もやや眠くなってるから大人しく引き下がる。

「あ、金ちゃん。俺のラビエルと金ちゃんのワイゼル交換してくんない？」

「ラビエルだけじゃなあ……幻銃士付きならいいぞ」

「よし、取引成立！」

こうしてカードを交換するのも金ちゃんだけになった。他の友人達はもうやめてしまって……というよりも疎遠になって久しい。

「そういえば高峰。仕事は見つかったのか？」

「うっ……まだ」

「おいおい、大丈夫か？」

はあ、嫌なこと思い出させないで欲しい。俺は先週仕事をクビになった……今、再就職をしようと面接を受けてはいるが不採用ばかり。

くう、三十路でクビとか……この不景気な世の中じゃかなり痛い。しかも、よりにもよって30才になる誕生日にか。

「さて、寝るか。愚痴くらい聞いてやつから元気だせ」

「おう、恩に着る。あー、でも遊戯王みたいにカードゲームが仕事にあつたらいいのに」

「確かにいいよな。だが、所詮二次元だ。地道に探すしかないさ。じゃ、電気消すぞ」

友達の金ちゃんが電気を消して、この日は眠りについた。ここでもし、あんなことを言わなかったら……あんなことにならなかったのかもしれない。

☆↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓★

チュンチュンと小鳥がさえずる音で目を覚ました俺はむくりと布団から起き上がる。今何時だろ、と携帯を見れば。

「6時か……あれ、圏外？　なんで？」

携帯が何故か圏外になっていて首を捻っていると、ガチャリと部屋にある扉が開いて、そこから金ちゃんが入ってきた。

「あ、おはよ。金ちゃん」

「はよ、高峰。飯は昨日の残りでいいか？」

「うん、もちろん」

携帯の方は後でいいや。今は朝飯を食べることにしよう。冷えてい  
るけど、それでも美味しいご飯を食べながらテレビをぼうつと見  
ていると危うく嘔き出しかけるところだった。

「では、次に海馬コーポレーションが主催するイベント情報です」

「は？」

「お、待ってました」

俺はポカンと呆けるが金ちゃんは待ちかねたと目を楽しげに細めな  
がらテレビから流れる音を聞き逃さないようにしている。え、ちょ  
い待ち。海馬コーポレーションって遊戯王に出てきた会社だろ？

なんでそれが目覚ましテレビで流れてるんだよ。そして、金ちゃん  
は不思議に思おうね。というか変なのは俺なのか？ ニュースでは  
海馬コーポレーションが主催するイベントについて映像を使いなが  
ら紹介しているが、俺は混乱してまともに聞いていない。と、ニュ  
ースは次に移った……次はデュエリスト育成学校の受験申し込み期  
日が終わるというものだった。

「あゝ、行きたいんだけど受かる自信ないんだよな。高峰は受けるのか？」

「……どうだろうね。就職とか考えたら受けた方が良さげだよね、うん」

「お前のデュエルの成績じゃ、無理だろ。俺と同じくらいだからな」  
適当に無難な答えを返していると、金ちゃんの言葉に戸惑った。デュエルの成績って、授業に盛り込まれてるの？ ナチュラルに対応してるけど、マジで遊戯王カードで遊ぶ仕事があるの？ どうしてこうなった？ というか待て。今ニュースでやってたのは高校だぞ。それに成績って……そんなことを考えながらカレンダーに視線を向けると、そこには15年前の西暦が書かれていた。

これだと俺、中学3年生？　そういえば金ちゃんをよく観察すれば若干低い？　もしかしなくても若返ったのか？　いや、金ちゃんはそのまんまなんだろうけど。金ちゃんが違和感を感じてないってことは俺は15才の時の姿に戻ったと考えるのが妥当か。

あゝ、もう訳分からん。それから俺は逃避をするように遊んだ。15年前だったのにWiiでスマブラをやってと。そして、軽くデュエルをした。鞆には30才の俺が使っていたデッキが入っていたが、机には15年前に使っていたデッキが置かれていたのでそっちを使った。

夢の中の金ちゃんのデッキは俺の知っているデッキとは程遠い構成だった。俺の方も似たり寄ったりだったけど、無駄と思うカードを



抜いたらよく回るようになって24戦19勝と勝ち越した。うん、最近負け続けだったからなんか嬉しい。

大いに遊んで夕方になったので家に帰宅しようと金ちゃん家の玄関に今はいる。

「まさか高峰に大勝されるとはな。昨日、お前手加減してたのか？」

「うんにゃ、夢見がよかったからその通りにしただけ」

「夢でもデュエルって、お前そこまでがり勉強だったっけ？」

カードゲームでがり勉強して……。俺は苦笑いしてこの日は誤魔化して帰った。そして、家に帰ると……。

「あ、お帰り馬鹿兄。もうすぐご飯だから」

「ああ、麻弥。できたら呼んで」

「へいへい」

小生意気な妹に出迎えられて、俺はそそくさと勝利の部屋とプレイトがある部屋に入った。そこで俺は鞆を開ける。中からは向こうで確認した通り30才の時に使っていた複数のデッキと微調整用のカード数枚……交換したばかりのワイゼルが入っていた。

シンクロもエクシーズもある。いい加減、目を覚ましてもおかしくはないし、帰り道の時に頬を抓ってみたら痛みがあったので現実だろう。というかそう想定して行動しないと社長とかペガサスとかに目を付けられる可能性があるし。

絶対にシンクロとエクシーズは使えない。というか、そもそもソリッドビジョンが反応しないだろうし。それにチューナーだったモンスターテキストからチューナーという文字が消えてるから出せないだけだね。まあ、星を揃えて出すエクシーズモンスターは召喚できるだろうけど出せた試しがないからな。

それに目を付けられるのは嫌だし、安全に暮らすなら使わない方が吉。俺としては夢落ちを期待したいが、痛みがある時点で無理だろう。どうしてこうなったんだか知らんけど、人生をやり直す有り得ない機会が得られたんだし、今度は仕事をクビにならないように頑張らないと。

出来たら彼女も作りたいな。昔はゲームに睡眠、食欲にかまけてそうだったことに興味無かったから。ああ、でも太ってたら無理だよなあ。いや、高校で一気に2倍に膨れ上がったから、今から努力すれば高3の頃にはきつと痩せてるはず。

よし、目指せスリム勝利……なんか売れない芸人みたいな名前になったな。さて、危なそうなカードを抜いていくつか組み直さんと。ここが遊戯王の世界ならアカデミア行った方が将来役立つだろうし、ドローパンを食べてみたいし。

主人公が居たとしても、どうせ俺はモブなんだから危険はないっしょ。あ、でも俺一期しか見てないんだよな。見た一期すら昔過ぎてろくに覚えてないし……確かE・HERO使いでガッチャって口癖

の奴が主人公だったな。

うし、成績のために徹底研究してあっさり負けないようにしよう。  
ただでさえE－HEROデッキは苦手なんだしな。要注意は属性ヒーローだ。他はどうとでもなるし。

色々考えている内にとある問題のデッキに手を伸ばす。確認せずに  
なんで問題と分かるかは簡単だ。俺のメインその2で、通称邪神デッキ。  
その名の通り三邪神が入っているデッキだ。

邪神を出すことに俺なりに特化させたこのデッキは、まさしく邪神  
がエースでありフィニッシャー。邪神が除外されるか墓地に送られ  
れば負け確定のギャンブルデッキ。だけど、勝率がまずまずと当初  
はネタで作ってすぐバラす予定だったのにいつのまにかメインの一  
つになっていた。

金ちゃんから邪神が憑いてるんじゃないかと冗談で言われたことがある。  
なんせ、絶対に一度は出るんだもんな。たった一度だけ三邪  
神がフィールドに出揃ったことすらあるし……ただ、その時はイレ  
イザーを狙われて負けちゃったけど。

俺としてはまだまだ使いたいのだが、この世界で三邪神を使うのは  
危なすぎる。絶対にペガサスに目を付けられるのは分かり切ってい  
るから。うー、でもバラしたくはないし……うん、これは手付かず  
にして保存しておこう。

デッキケースに丁寧に納めて作業を再開。12個あったデッキは9

つまで減った。だって、しょうがない。減った3つはシンクロ主軸だったからシンクロが使えなかったらパワー不足と硬さ不足で負けるのは目に見えてるし。それにその内の一つは切り札が結束……絵柄的に絶対に使えない。そういえば今更だけど、このデッキにあるカードってソリッドビジョンに映るんだろうか？

そんな最初に気付いて当然の疑問にぶち当たった時、階下から俺を呼ぶ声がした。ご飯が出来上がったのだろう。ひとまず浮かんだ疑問は置いといて夕飯食べよう。この問題を解決できるのではないかとで調べないといけないけど。

居間に着いた時に叫ばなかった自分を褒めたい。そこには4年前に亡くなったはずの両親が座って待っていたからだ……いや、15年前だし生きてて当たり前のはず。なんかもう、どうでもいいや。夢だろうとあの時悔いたことをやれるようになったんだ。なら、夢から覚めるのもやることやってからだ。

「……母さん、父さん。俺、デュエル・アカデミアに行きたい」

そして、プロになって温泉旅行を家族で行くんだ。俺はそう心に誓った。

## **TURN-01【vs試験官】（前書き）**

第一回目のデュエルです。間違い、脱字があったら教えてください

## TURN-01【vs試験官】

俺が父さんと母さんにデュエル・アカデミアに入学したいと伝えると凄まじく驚いていた。妹二人にまで驚かれる俺って……。

まあ、理由はすぐ判明したんだがな。驚かれた理由は単純で、学校の俺のデュエル成績は学年最下位……しかも、授業にデュエルモンスターズが導入されてからずっと。妹にすら大連敗中らしい。

まあ、あんなゴテゴテしたバランスの悪いデッキ使えばな……最高攻撃力が1500って。いくらなんでも低すぎだ。金ちゃんのデッキだと出たので1600……どっこいどっこいだった。

俺がまずしなければならぬのは学校の成績を上げること。英語以外壊滅的に忘れてしまっていたけれど、デュエル・アカデミアの入試はデュエルに関する筆記と実技だったので上げるのはデュエルの成績だ。

いきなり強力なカードを入れると不審な目で見られることを想定して、下級戦士のみで構成されたデッキを新たに組んだ。切り札はコマンド・ナイト。キーカードは一族の結束を含む強化カードだ。

この世界だと攻撃力3000を超える数値は驚愕すべき事柄であることを俺は知らなかった。それをデュエルする前に知ることが出来たのは運がいいと言わざるを得ない。テレビで海馬社長とプロデュエリストのデュエルで青眼の白龍が出たときの歓声と言ったら……。

ありがとう、アナウンサー。的確な言葉で助かりました。そのお陰

で俺は強化もほどほどにしよう決めて、学校でさっそくデュエルをした。そうしたら平均2400の戦士達による蹂躪劇だった。

あれよあれよと言う間に俺の成績は鰻登りだ。たった三週間で学年次席まで登り詰めた。うん、元の世界だと禁止カードもこの世界なら平然と使えるから回る回る。ちゃんとした場所で強欲な壺を使ったりとかな。

それに良いことがあった。ブラッド・ヴォルスとミノタウルの2枚と原作アニメ効果の天よりの宝札を交換してもらった。もちろん、宝札は2枚だ。学年主席の人と仲良くなって獣戦士系でいいカードがないかと聞いてきたので、その2枚を見せたら欲しいと即決。

交換したら宝札2枚だったのは驚いた。俺が交換したカードはどちらも星4のノーマルモンスター。しかし、この世界なら一線級の攻撃力持ちだ。しかも、しかも、その主席曰わくこの2枚は海馬社長が使ったことがあるカードとして一枚20万円取引されてるらしい。

宝札は一枚15万なので彼、松山君は申し訳なさそうにしていた。まあ、大切に使うてくれるならと言って笑うとこっちが戸惑うくらい感激していた。

うん、人を感激させるなんて元の世界じゃ不可能だったな。実態は三十路の誕生日に仕事クビになったマダオだしなあ、俺。

まあ、この世界だとデュエルが強ければマダオなんて呼ばれないだろうし、目的のために勝って勝って勝ちまくってやる。日々、デュエルをしていてわかったことだが、デュエルのレベルが全体的に低い。だから俺くらいの戦術でも無双が出来る。

松山君みたいな例外もいるにはいるが、同学年の生徒は大したこと  
はなかった。ただ、松山君にはいいところでいつも負けている。コ  
マンドナイトでロックして攻撃したらサイクロンで一族の結束を破  
壊された上に収縮されてロックを外されたり、野生解放使って真っ  
向から叩き潰されたり……わざとモンスターを揃えさせられて激流  
葬で一気に流され。

もう、ほんと罨と魔法の扱いが巧いっただらない。さすがは学年主席  
で満橋中学最強だ。偽装用デッキじゃなくて俺お気に入りデッキ  
で早く戦いたい。早くアカデミアの受験日来ないかな。と、そう  
だ。忘れるところだった。

俺が親孝行をしようと誓った翌日、部屋を漁っていると鍵を見つけ  
て部屋に何故かあった鍵付きの戸棚を開けた。そうしたら中には見  
慣れないデッキが複数あって中を確認してみたら、かなりのレアカ  
ードが大量に……ゲームの中でしか組んだことのないバーンデッキ  
やE—HEROデッキなどがあった。

そこでようやくこの世界に持ち込んだ荷物を確認をした。そこでシ  
ョックなことが……PSPに差したままだったはずのゲームソフト  
が消えていた。差してあったのは遊戯王のゲーム……最新作のTF  
6だ。

高かったのに……しかし、そこで見つけたデッキを思い出して、全  
部確認すると時械神のデッキを見つけてとある可能性に行き当たっ  
た。ゲームの中で組んだデッキが実体化したからソフトが消えた、  
と。そんなバカなと一笑できる考えだが、遊戯王の世界に來たこと  
を思えば安易に否定するのは無理だ。



まあ、このデッキの数々は有効利用するつもりだ。もっとも非公式デュエル限定だが。

そんなこんなでアカデミアの入試の日が近付いてきたある日、俺は松山君からデュエルディスクを借りることが出来た。今は自分の部屋で装着している。なんで自分家で付けているかは簡単。

ソリッドビジョンの投影比率を小さくして、持っているカードがちゃんと反応するか確認するためだ。ただ、邪神が反応すればみんな反応するだろうからさっさと特にお気に入りのアバターとドレッドをディスクにセットした。

投影オンリーだから生贄はいらない。そうしたら小さくアバターとドレッドが無事投射された。ああ、これで安心して試験に臨める。今まで中学での授業だと生徒全員が出来るように机をくっつけて紙のシートでやっていたから今の今まで確認できなかったんだよな。

それにしても良い仕事をしているな、海馬社長は。アバターがちゃんとドレッドの姿に変わってるよ。くっ、公式デュエルで使えないのが悔やまれる。まあ、出せるかは微妙と言わざるを得ないが。

そうして借りたデュエルディスクを松山君に返すと、とうとう入試の日になった。まずは筆記で、翌日に実技という予定になっている。筆記に関しては分からない問題もあったが、手応えはあった。

そして、翌日。俺はワクワクして眠れず、試験会場である海馬ランドに受験生で一番に入場した。そこで渡されたのは31番のプレート……つまり筆記試験の成績は31番目というわけだ。まあまあだ

な。実技でミスをしなければ十分に良いスタートを切れる。

この日のために試験用のデッキを組んだんだ。実技はトップで通過してやる……圧勝すれば確実に入学できるだろう。試験用はそれが可能だ……多分。

ふぁ、早く来すぎて暇だ。それにあんまり寝てないから眠くて仕方がない。携帯のアラームを試験が始まる20分前にセットして……うん、これなら2時間は眠れる。よし、おやすみなさ〜い。

☆↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓★

「——い——おい、たかみ————おいっ！」

「んあっ？」

寝ていた俺は起こされた。誰であろう友人の金ちゃんに……ちなみに金多 剛が本名だ。略して金ちゃん、小学校からこのあだ名は変わらない。なんか焦ってるけ……て、あれ？ 俺はがばっと起き上がり、携帯の画面を見る。そうしたらもうすでに試験が始まっている時間を大幅に過ぎていた。

「あ、あの金ちゃん。俺って不合格？」

「あともう少しでな。ほれ、さっさと行ってこい」

多分、試験用のデュエルディスクを受け取り、俺は慌てて鞆からデ  
ッキを取り出してセットした。そして、金ちゃんに札を言って試験  
官が待つ壇上に上がる。

「デッキ調整で徹夜したのかい？」

「えっと、はい。絶対に合格したかったので……」

「はっはっはっは、そのやる気は花丸をあげよう。だが、体調管理  
もデュエリストの前に人として当たり前だからな。今後は気をつけ  
るように」

「はい」

気安く朗らかな男性試験官でよかったと思う。うん、寝過ごして不  
合格にならないみたいでよかった。

「それじゃ時間も押してるし、さっそくやろうか」

「お願いします」

お互いにデュエルディスクを構える。そして……。

『デュエルっ!』

互いに開始の合図を高らかに宣言する。

「先行は君からだよ」

「はい、ドロー!」

あれ? スネーク・レインが2枚にエーリアン・リベンジャー、エーリアン・マザーと宇宙獣ガンギル……あ、エーリアン・グレイがある。って、ちょっと待て。

デッキ間違えたあっ!? これエーリアン主軸のC c a r a y h u<sup>コカライ</sup>  
a<sup>ア</sup>デッキじゃないか! 試験用に組んだのは剣闘獣のデッキなのに……あ、慌てて取り違えたよ。しかも、初手がかなり悪いし……グレイしか出せないじゃないか。

うう、合格最低ラインに達せれるように足掻いてやる。まずは……。

「手札から通常魔法、スネーク・レインを手札のエーリアン・マザーを捨てて発動します。このカードはデッキから爬虫類族モンスターを4枚墓地に落とします。落とすのはエーリアン・リベンジャーとエーリアン・ヒュプノ2枚とエーリアン・テレパス」

「ん？ そんなデメリットカードを使って何がしたいんだい？」

「ただの墓地肥やしですよ。さらにもう1枚、スネーク・レインを手札の宇宙獣ガンギルを捨てて発動。エーリアン・テレパスにエーリアン・ハンター2枚、エーリアン・キッズを墓地に落とします。最後にモンスターをセットしてターンを終了します」

これで10枚爬虫類が墓地に落ちた。8枚も圧縮出来たから……あと27枚か。せめて試験官が大物を出す前にリベンジャーを出す準備整えないと。グレイじゃなくてウォリアーの方がよかった。

「では、私のターンだ。ドロー。私は手札からモンスター効果を発動。手札からサンダー・ドラゴンを捨てる事でデッキから別のサンダー・ドラゴンを2枚まで手札に加える事が出来る」

このパターンは……融合来るか？ ライフが4000で双頭の雷龍サンダー・ドラゴンはキツいってもんじゃない。今日は厄日なのか？

「サンダー・ドラゴン2枚手札に加え……私はRAIMEIを攻撃表示で召喚」

黄色い稲妻模様が入った紫色の全身スーツを着た美少女が実体化する。確かこのモンスターって戦闘破壊で発動するサーチモンスター

か。攻撃力も1400と高めだ。

「バトル！ R A I－M E Iでモンスターに攻撃！ ライトニング・キック！」

R A I－M E Iが稲妻を纏った跳び蹴りでリバースして姿を現したグレイを豪快に蹴り飛ばした。

「リバース効果発動！ リバースした時、相手フィールド上の表側表示で存在するモンスターにAカウンターを一つ乗せる！」

グレイが飛ばされながら緑色の液体をR A I－M E Iに吐き付けると砕け散った……うわ、グロっ！？ なんか周りから女の子の悲鳴が聞こえたが、無視だ。

「さらにリバースしたエリアン・グレイが戦闘で破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから1枚ドローする！」

引いたのは……またグレイかよ！

「ふむ。私は2枚セットしてターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！」

エーリアン・ブレインか……まだマシだな。

「俺はモンスターをセットし、1枚伏せてターンエンド」

「私のターン、ドロー！ 私はRAI-MEIを生贄に充電池メンを攻撃表示で召喚！ 充電池メンの効果発動！ このカードが召喚に成功した時、手札またはデッキから充電池メン以外の電池メンと名の付いたモンスター1体を特殊召喚することができる。私はデッキから電池メン一単三型を攻撃表示で特殊召喚！」

せっかく乗ったAカウンターが……しかも、電池メンデッキかよ。裏側セットでよかったかもしれん。電池メンデッキの常套手段は単三型を特殊召喚して地獄の暴走召喚で一氣に揃える戦法だ。電池メン一単三型の効果は……。

「電池メン一単三型の効果、このカードと同じ名前のモンスターがすべて攻撃表示だった場合、1体につき1000ポイントアップする。守備表示だった場合は守備力が1000ポイントアップだ。さらに充電池メンの効果、このカードの攻撃力・守備力は自分フィールド上に表側表示で存在する雷族モンスターの数×300ポイントアップする。充電池メンを合わせて2体……よって600ポイントアップ」

3体揃えれば攻撃力が3000……ライフが8000有っても耐え

きるのは難しい。ただ、地獄の暴走召喚を使うには相手側……つまり俺のフィールドに表側表示のモンスターがいなければならぬ。グレイはセットで出したから発動条件を満たさなかったわけだ。そもそも手札にあるかは怪しいけど、あると仮定して行動した方がいい。

「バトル。私は電池メンー単三型で伏せカードを攻撃！ スパーク・エンド！」

「リバーズ！ 俺は充電地メンにAカウンターを乗せる！ さらにエーリアン・グレイが破壊された時、罠カードエーリアン・ブレインを発動。このカードは自分フィールド上に存在する爬虫類族モンスターが相手モンスターの攻撃によって破壊され墓地に送られた時に発動することができる。その時に攻撃を行ったモンスターのコントロールを得て、そのモンスターを爬虫類族として扱う」

「なにっ!？」

「そして、エーリアン・グレイの効果でドロー！」

これで単三型の分は下がった。それでも充電地メンの攻撃力は2100。単三型の分を引いて1100のダメージか。

「ならば充電地メンで電池メンー単三型を攻撃！ チャージ・ショット！」

「くっ……!？」



おお、爆風が起きた。リアルだなあ……って、んなわけあるかい。これ立体映像だよな？　なんで爆風が起きるんだよ。でも、周りは気にしてないし問題はないのか？　ないんだろうな。そよ風程度だから今後は無視だ。

これで俺のライフは残り2900になった。双頭の雷龍サンダー・ドラゴンの攻撃1発は耐えられるが、充電地メンの存在で双頭の雷龍が融合召喚されたら詰む。試験官の手札は4枚、その内2枚がサンダー・ドラゴンとしても残り2枚に融合は無いんだろう。

グレイの効果で引いたのは大嵐だったし……本格的にヤバいぞ。まあ、これを使って伏せてあるカードを破壊しないとな。

「私はそのままターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！」

「このままだと充電地メンで押し切られてしまうぞ」

確かにこのままだったら負けるな。手札のモンスターは星6のリベンジャー1枚。それと大嵐に……強欲な壺！

「俺は大嵐を発動！」

「なっ、私のミラーフォースと暴走召喚が！？」

あ、危な過ぎだろ。カウンタートラップ警戒して発動してよかった。

「さらに手札から強欲な壺を発動して2枚ドロー!」

まだギリギリか？　俺が引いたのはスネーク・レインと細胞爆破ウイルスだ。

「俺はカード1枚を伏せてターンエンド」

「私のターン、ドロー!　私はライオウを攻撃表示で召喚!　これが通ればお終いだよ。バトル、私は充電池メン、ライオウでダイレクトアタック!」

よし!

「充電池メンの攻撃宣言にリバースカード発動!　細胞爆破ウイルス!　このカードはAカウンターが乗ったモンスターの攻撃宣言時に発動することができる!　相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターをすべて破壊する!」

「なんだってっ!?!」

これでなんとか凌いだ。でも、まだまだ危機は脱してない。手札には召喚できるモンスターはいないからな……何が何でも引いてダメージ与えないと。

「くっ、ならば私は500ポイントライフを払って手札から充電器を発動する。墓地から電池メンと名のついたモンスター1体を特殊召喚する。私は充電池メンを特殊召喚してターンエンド」

なっ、クソ。充電池メンの攻撃力を超える下級モンスターなんていないぞ!?

「……俺のターン、ドロー! くっ、俺はモンスターをセットしてターンエンド」

引いたのはエアリアン・ウォリアーだった。攻撃力は1800と充電池メンの元々の攻撃力と同じだが、300ポイントアップしてるから勝てない。

「私のターン、ドロー! ふっ、ようやく来たか」

嬉しそうに引いたカードを見る試験官に俺は嫌な汗を掻く。ここで喜ぶカードなんて1枚しかない。

「私は手札から融合を発動！」

そう融合だ。恐らくあのデッキのエースモンスターの登場だ。

「手札のサンダー・ドラゴン2体を融合！ 招来せよ、双頭の雷龍<sup>サンダー・ドラゴン</sup>！」

攻撃力2800の雷族の融合モンスター。サンダー・ドラゴン1枚と融合が手札にあればすぐにでも出せるお手軽な上に強力……蘇生制限もないから蘇生も容易だ。

「バトル。充電池メンで伏せカードに攻撃！」

「エーリアン・ウォリアーの効果発動！ このカードを戦闘によって破壊したモンスターにAカウンターを2つ乗せる！」

「双頭の雷龍<sup>サンダー・ドラゴン</sup>でダイレクトアタック！ サンダー・ホーン！」

ぐっ、軽い衝撃が。残りライフはたったの100……双頭を倒せるモンスターは1匹だけ。3詰みしてるはずなんだけどなあ。

「私のターンはエンドだ。次のターンで私の勝ちだ」

「うう、ドロー」

引いたのは……。

「よっしゃあっ！」

「お、いいカードでも引けたのかな？　だが、サンダー・ドラゴン双頭の雷龍を超えるのは難しいぞ」

引いたのは地縛神とは別の切り札。しかも、今の状況で出せば神にすら勝てる。っと、念には念を……。

「俺はエーリアン・リベンジャーを捨ててスネーク・レインを発動！　デッキから爬虫類族モンスターを4枚適当に墓地に送る！」

「む？」

「このターンで終わりだ！　俺は手札から邪龍アナンタを特殊召喚！　この時、自分のフィールド上と墓地に存在するすべての爬虫類族モンスターを除外する！」

除外された爬虫類族モンスターの数は……18枚！

「邪龍アナンタの攻撃力と守備力は特殊召喚時に除外した爬虫類族モンスターの数×600ポイントになる。除外した数は18体……

よって邪龍アナンタの攻撃力は10800!」

「10800だって!？」

「バトルだ! 俺は邪龍アナンタで双頭の雷龍サンダー・ドラゴンを攻撃! インフィニット・エクスキュージョン!」

「ぐ、くううう…」

邪龍アナンタは6つ首の龍だ。そのすべてから黒い奔流が吐き出され双頭の雷龍サンダー・ドラゴンを飲み込む。占めて8000のバトルダメージだ。このデッキの切り札中の切り札。

このデッキは本来、エーリアンで殴りながら地縛神コカライCarayhuaを召喚して攻める。Carayhuaが倒され墓地が肥えてきたら邪龍アナンタを召喚して勝ちを奪いにいく。そんなコンセプトだからか、今回みたいにとこん手が悪いと簡単に追い詰められてしまう。

まあ、今回みたいな悪さは滅多にないんだけどな。いや、まったく……焦るわ。

「ふう、試験終了だよ。まさかあの状況で逆転されるなんてビックリしたよ。結果は後日通達するからね」

「はい、ありがとうございました!」

俺は礼をして壇上を降りる。試験が終わった者は自主帰宅していいということなので俺はさっさと帰ろうと思う。ゆっくりと寝るのだ。金ちゃんに起こしてくれたことに改めて礼をしてから俺は試験会場を出る。その時に……。

「ヤバイヤバイ、遅刻だぁ!？」

茶色い髪のおかっぱ頭に近い髪型の少年が焦りながら俺が来た道を走り去っていった。うん？ あっちは入試で貸切状態なんだけど、まさか入試に遅刻したのか？

始まる前に寝て、寝過ぎた俺が言えた義理じゃないけど大丈夫だろうか、あの子は。まあ、俺が気にしたって仕方がない。よし、今日は寝るぞ〜！

## **TURN-01【vs試験官】（後書き）**

ちなみに主人公の名前《高峰 勝利》は《たかみね まさとし》と  
読めます。



## **TURN-02【アカデミアで出来た友達 前編】（前書き）**

前回の第2話を前編後編に分けました。前編は全然変わってませんが、後編は加筆修正したデュエルシーンです。

今回使うデッキがオリ主『高峰 勝利』の一番信頼し頼りにしているデッキです。

## TURN-02【アカデミアで出来た友達 前編】

合格通知が来た。それからは大変だったな。家族は大いに驚いて豪勢な夕食だったり、妹2人に見直したと言われたり。

ただ、残念なのは金ちゃんが落ちてしまったことだ。知識が足りず、実技で有効な手を打てずに負けてしまったらしい。俺が渡したカードも引けなかったと言っていた。

だけど一浪して来年再受験するらしい。今まで学年最下位だった俺が合格したことで、1年勉強し直せば自分も合格できるだろうと考えたらしい。どうしてそんな考えになったか素直に聞けば、俺が隠れて勉強を頑張っていたらと言われた。

いや、まあ、学年最下位から次席に登りつめた時に一部生徒とある教師に八百長の嫌疑かけられるほど急だったんだけどな。それを指摘すればカードが足りなかったから今まで伸びず、急に伸びたのはカードが集まって努力が実ったから。

そもそも俺の性格上、八百長なんてしないときっぱり断言した金ちゃんに俺は嬉しくなった。確かにあのデッキ、かなりカード不足だったからな。直接排除系の罠なんて入ってないくせに60枚……ほとんどが一時凌ぎしか出来ず、回りくどい排除系ばかりか。

最高攻撃力が1500でポールポジションって意味なしだと思ったからサイクロンが2積みしてあったから、ポールポジションで1500以上のモンスターを破壊するつもりだったんだろうね。

あっちでも俺を氣遣ってくれた先生はこっちでも同じだった。俺が次席になった時は大層喜び、アカデミアの入試合格を聞いた時は俺の肩を叩いて喜びを表していた。ちなみに松山君も合格している。

俺が渡したブラッド・ヴォルスが決め手になったらしい。それを引いて決め手にまで導いたのは松山君の実力なのに、感謝されるのはかなり違和感があった。でも、まあ、感謝されるのは悪い気分じゃない。

それで色々と準備をしてアカデミアに向かう日になった。俺は船に揺れ揺れながら今はおむすび片手に海を眺めている。ヘリコプターか船かの選択式だったが、のんびり行きたかったので船を選択した。なのでヘリ組よりもちょっと早めの出発だ。

船での食事はバイキング形式で、お持ち帰り用におにぎりまである。今食べてるのもそれだ。うん、和むわあ。なんて至福、なんて贅沢。塩加減も抜群に美味いおにぎりを食べながら大海原を見渡せるなんて……なんて幸せ者なんだ、俺は。この景色とこのおにぎりなら、何個でも食えるぞ。

あ、いかんいかん。痩せるって決めたばかりなのに……明日から頑張ろう、うん。そうして優雅な船旅を3日も満喫して俺はデュエルアカデミアに到着した。これぞ大自然と言えるような島だ。

食べ物の輸送代とかバカにならないだろうなあ。それにしても電気は通ってるのかな？ この世界にもPSPがちゃんとあったからモンハンやりたいんだけど、充電できないとあつと言う間に遊べなくなるから、通ってなきゃ困る。

っと、ヘリ組も到着したみたいだな。大型のヘリが船が停まっている港から見えるヘリポートに向かっていった。遅刻したらしゃれにならないし、校舎に向かうかな。俺は旅行用のキャリーバッグを引きながら校舎に向かった。

☆↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓★

校長先生の長い話が終わり、俺は自分の寮にやってきた。一人一部屋あるらしく、とっても大きく立派な建物だった。ちなみに俺はライエローだ。昔、テレビの特集で見た軽井沢の別荘みたいで、今夜の歓迎会がとても楽しみになる。

それと学校からデュエルディスクをもらったからこれからはいつでも立体映像でデュエルができる。これ、買おうとすると高かったんだよね。バトルシテイの参加者はタダで手に入れたみたいだけど。安くて2万、高くて6万……さすがに買ってくれなんて言えないよ。

つと、ようやく着いた。俺は自室に着くと部屋に入り、事前に送っておいた荷物を開ける。その中には小さな金庫が入っていた。これは俺が持ち込んだ財布の中にあつたお金を使い買った……全部使い切っても小さな物しか買えなかったが、これはダイヤルに加えて鍵も付いてる二重ロック式。鍵には紐を付けて落とさないように肌身離さず持ち歩く予定だ。

金庫の中にしまうカードは邪神を含んだこの世界ではレア中のレアな物だ。三幻魔も金庫の中……パソコンで調べた限り、D・HERO、宝玉獣、アルカナ、サイバー系など、この世界だと特定人物しか持っていないと広く知られているカードをしまっている。こんなの見られたらどうなるか分からないからな……なら、持つてくるなど言われそうだが、家に置いてると母さんか妹に発見される可能性があるから仕方がない。

まあ、E・HEROは主人公以外にもプロに使い手がいるし、比較的簡単に入手できるから金庫にしまう必要はない。ただ、学園には主人公一人だけだったはずだから見分けは付くだろう。ただ、テレビだと融合体は3体しか見たことがないんだよね。フレイム、サンダー、テンペスターの3体……下級も基本の8体のみ。

ヒートやエアーマンは見たことないんだよね。属性HEROも。この世界に無いんだろうか？ さすがに調べきれなかったから確認のしようもないし……ただ、この世界のカードは色々とカオスだった。

野球の遊戯王カードがあったり、テニスの遊戯王カードもある。将棋の遊戯王カードまであったのは驚いた。やっぱり希望とかアンケート取ったりして新しく作ったりしてるんだろ。そういえば魚族限定のコントロール奪取カードで“一本釣り”なんてのもあった。

使うとしても相手が限られてる、と思ったが自分の墓地から蘇生もできる効果があり速攻魔法だから魚族版の結界通路みたいなものだった。それにプラスして相手フィールドに存在する魚族モンスター1体のコントロールを奪う効果に、墓地蘇生は相手の墓地も効果範囲とけっこう強力だ。

でも、俺は魚族を使わないから強力でも宝の持ち腐れになる。それに高いし……1枚4万と書かれてたのには心底驚いた。まあ、魚族デッキには必須の蘇生カードだからかもしれない。そんなことをつらつらと考えている間に俺は金庫の中に邪神デッキと各種カードを丁寧にしまい、金庫はクローゼットの中に置いた。ちなみに金庫の扉は壁に向けて、その上に布を敷いて隠してから畳んだ服を乗せるカモフラージュも万全。

結構重いから盗む前提で、場所を知ってないとまず触らないだろう。暗証番号も入試の時に乗った電車についていたプレートの番号だし、誰もわかるまい。適当に回して当たっても鍵が無ければそもそも開かないし。服もしまったし、一番のお気に入りデッキも母さんに買って貰ったケース付きジャケットに入れたし……そのジャケットの上から大きめに注文したラィエローの制服を羽織ってっど。

今日1日はもう歓迎会くらいだから時間になるまで暇を潰してこよ。となれば学校探検だな。学校からもらった生徒手帳代わりの端末PDAがあれば迷わないだろう。通信機能ありメール機能あり地図機能ありとかなり高性能な代物だ。準備はOK、よし。

さて、探検だ！

そう意気込んで出たはいいものの、数十分後……。

「いっ、どっ？」

思い切り迷っていた。PDAは操作が分からず適当に弄って……今は画面にエラーと出てしまっている。直し方なんてわかるはずもなく、とにかく人に聞くべく歩き回っていた。そしたらどんどん意味が分からなくなって、人にも会えずに呆然としてるわけだ。

「あはははははは！」

「ん？ 向こうから声がする。やっと帰れるかも！」

近くの扉から聞こえる笑い声に俺は安堵と同時にテンションが上がる。いい加減足が痛くなってきたけどイエロー寮に帰れるとわかって俺は声ができる方に走り出し、赤と青の制服が見えたところで声を張り上げた。

「ビーク「すみませ〜ん！」

なんか声が聞こえたけど、多分気のせいだ。

「な、なんだお前は。大きな声を出しやがって」

「あ、この人は……」

「翔、知ってるのか？」

なんかオシリスレッドの方は2人で話し始めちゃったからオベリス  
クラブ1の2人に聞くか。



「ちょっと道に迷っちゃって。ここからイエロー寮に戻るにはどうすりゃいいかな？」

「はあ？ そんなのPDA見りゃいいだろうが」

「いや、エラーになって何がなにやら」

俺がPDAの画面を見せて教えてくれるように軽く頭を下げながら頼んだのだけど。

「オレ達オベリスクブルーが半端者の寮など知るわけがないだろう。他を当たれ」

「む、知らないのか」

知らないなら仕方がない。けど、態度がな。こっちは頭を下げて頼んだのに雑に対応されてムカツとする。

「なあなあ、俺達が案内してもいいぞ！ その代わり俺とデュエルしてくれよ」

「へ.？」

俺がオベリスクブルーの2人にムカムカしているとオシリスレツドのおかつぱ頭の方に声をかけられた。

「ほんと？」

「マジマジ。代わりに俺とデュエルしてくればな」

「それくらいだったらお安いご用だ。地図が読める人に会えてよかった」

「おい、それはどういう意味だ！」

「え、イエロー寮知らないんでしょ？」

俺の言葉にメガネをかけた方のブルーが食ってかかってきた。結構ムカついたから意趣返しもかねて言ったけど、こうも食いつきがいいのか。PDAには地図が出るって説明書には書いてあったから知らないってことは読めないって解釈したただけだね。

確か入学案内にはブルーは中学での成績優秀者用のクラスだって書いてあったから、癪に障ったんだろうね。金ちゃんからはブルーはプライドが妙に高いのが多いから気をつけろと言われてたけど、こ

の分だと本当みたいだな。

「貴様、オレの言葉を遮るだけじゃなくなんだその態度は！」

っと色々考えていると客席部分に立っている……なんか漫画の主人公みたいな髪型の人物が俺を見下ろしていた。もしかしてGX主人公か？ にはしてはなんか、物語最初に出てくるかませなエリートっぽいんだけど。

「えっと、どなた？」

「な、なんだと！？」

え、どこに驚愕する部分があったんだ？ 大げさに驚く少年に俺は首を傾げる。

「外部入学者はとことん無知だな。この方は中等部からの生え抜きのエリート。中等部クラスのナンバー1」

「未来のデュエルキングの呼び声高い、万丈目準様だ」

「ふうん」

いや、アカデミアの中等部で有名なのはわかったけど。他校の順位なんて知るわけないんじゃないか？ それに未来のデュエルキングって、まあ、夢は大きくだね。

「将来の夢は大きいに越したことないからね」

うんうん、頷いているとなんかブルー生徒2人と万丈目という少年の纏う空気がやや怖い。あれ、何か怒らすこと言ったかな？

「大した自信だな。さすがは入試でまぐれにも8000のオーバーキルをしただけはある」

「あ、えっと、そりゃどうも？」

んん？　なんか急に褒められた……なんで？　唐突に褒められ困惑していると……。

「こんなところで何をしている。翔」

「……翔壱さん」

丸メガネをかけたオシリスレッドの少年が俯きながら、声を掛けてきた少年に返事をした。声を掛けてきた少年はオシリスレッドの翔と呼ばれた少年と瓜二つ……違うのはメガネがない事と目つきがキツいところか。ここまで似てる上に兄と呼んだって事は双子か。つと着てる制服は青。つまりオベリスクブルーか。

「ここはお前みたいな雑魚が来るべき場所じゃないさっさとボロ小屋に帰るんだな」

うん、第一印象は最悪。こんなのは仲良くできそうもないし、こんなのが兄だなんて翔君には同情するよ。

「誰だ、お前。翔の兄貴みたいだけど言って良いこと悪いことがあるぞ。翔に謝れ」

「……兄貴」

「貴様は遊城十代か。この我がオレが雑魚に頭を下げるわけないだろうが。同じ学校に通っているだけでも虫唾が走るんだからな」

うわあ、駄目だ。こいつ、性格が悪すぎる。万丈目と他2名も顔をしかめてるのを見ると、オベリスクブルーでも浮いてるんだろなあ。まあ、そんなことよりも。

「あなた達なにしてるの」

さっさとこの場を退散しようと会話に割り込もうとしたが無理だった。黄色に近い茶色の長い髪の女の子が腕を組みながらやってきた。翔の兄のブルーはその女の子が出てくるとニヤリと笑う。

「わあ、綺麗な人……」

「明日香じゃないか。我のモノになる気になったのか？」

「お断りよ。冗談でも言って良いことと悪いことがあるわよ」

なんだろうか。顔を赤くしている翔と、目が完全に胸にいつている翔の兄……やっぱり兄弟だから反応が似たり寄ったりなのか。ていうか迷って腹が減ってるから帰りたいんだけど……そろそろだろうし。

「冗談ではない、本気だ」

「嫌よ。私にだって選ぶ権利があるわ」

「丸藤っ！ 天上院君が嫌がっているだろう。やめたまへ」

おお、万丈目が満を持して止めに入った。うん、俺から見ても女の子は嫌がってたしな。

「ふん、雑魚その2は黙っている。貴様に我に意見する権利はない」

「くっ、なんだとおっ!？」

「我に負け続けているだろうが。それがオベリスクブルーのトップ？ 笑わせてくれる。明日香にふさわしいのはこの我だ」

こういうのをナルシストって言うんだろうか。本物なんて初めて見

たよ。まあ、デュエルが強ければたいは見逃される世界みたいだし、こういうのが居ても不思議じゃないのか？ あの子には悪いけど、もう限界。

「なあ、あんなのはどうでもいいから、そろそろ頼みたいんだけど……」

「今、なんと言った黄色い雑魚が」

「腹減ってもう限界なんだが、十代で良かったか？」

「お、おう」

なんかナルシーが話しかけてきたけど無視。あんなのと話してたら時間の無駄になる。話しかけた十代が戸惑いながらも腹を鳴らす俺を見て苦笑いを浮かべた。

「そのあなたの言う通りね。それにそろそろ歓迎会が始まる時間よ。だから私は行くわ」

「明日香、まだ話は終わってないぞ！」

「私にはないわ」



そう言って女の子はさっさと行ってしまった……しかも、冷たくあしらわれてやんの。さて、俺も十代に案内してもらって帰るか。

「貴様っ！？ 余計なことを……雑魚の分際で！」

「十代、頼むな」

「おうよ！ 約束忘れるなよ」

「まあ、デュエルはまた今度な。もうすぐ歓迎会があるから時間ないし……なによりも腹が減ったからな」

何か言ってるが、答えると間に合わなくなるから無視しよう。十代ももう興味を失ったのか帰る気満々だ。翔はあわあわしているけど。

「オレ達も行くぞ」

「あ、はい。万丈目さん」

万丈目達もさっさと立ち去ったし、俺達も行こうか。十代が走り出

してしまったので俺と翔は慌てて追っていく……ちょ、速い！俺、  
太ってるから足遅いんだよお！？

あ、こら。翔まで置いてくな！案内してくれるんだろ！

☆↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓★

無事に十代に案内されて帰ったイエロー寮での歓迎会で俺は大いに  
楽しんだ。十代と翔という新たな友人も見つけたし、今度レッド  
寮でデュエルする約束もしたし、楽しくなるぞ。

そうワクワクしながらメインデッキを調整していると、イエロー寮  
を管理する先生に直してもらったPDAが鳴った。

「誰だ？」

映像付きメールみたいだったため再生してみると、映っていたのは  
あのナルシーだった。翔の兄、丸藤翔壺だった。

『今晚、我達が出会った場所にて待つ。貴様の身の程というものを思い知らせてやる。臆せば来なくとも代わりに別の奴のデッキが無くなるだけだな』

なんだろうか。凄まじくムカつく顔で笑ってるし、しかも、なんか物語で出てくる類の人質を取る悪役なこと言っとるし。うう、校則で夜歩くなって書かれてるから行きたくないんだが……俺とは別の人が被害に遭ってるかもしれない。それは寝覚めが悪すぎる。

「行く、しかないか」

デッキは……メインだな。向こうでもよく使って、金ちゃんのエクゾディアデッキに唯一対抗できたデッキ。さらにF・G・Dが3体、究極竜騎士が2体揃った場を全滅させた唯一のデッキ……あの時はもう駄目かと思ったな。

このデッキなら基本的にどんなデッキにも対応は可能だろう。弱点もはつきりしてるけど、それさえ当たらなければ大丈夫だ。さて、ちやつちやか終わらせて帰って寝よ。

この世界のデュエリストでこのデッキの弱点を使う人なんて滅多に

いないだろうしな。というかいるんだろうか？　かなり特殊だし。つと、こっそり行かないとな。抜き足差し足千鳥足つと……あれ、なんか違うような？　まあ、いいか。

先生に教わった通りにPDAを操作して地図を表示してナルシー翔壺と遭った場所、オベリスク専用のデュエル場だったな。やや足取りは遅いもののなんとかデュエル場に着くと……。

「あっはっはっはっは！　遊城十代。雑魚その2を倒した程度で我に勝てるとは思い上がりも甚だしい。貴様のデッキはアンティの取り決め通りに貰うぞ」

十代が膝を屈して、十代のらしきデッキを持って高笑いしている翔壺の姿があった。

「あ、兄貴い」

「ん、遅かったじゃないか。高峰勝利」

「勝利じゃない、勝利だ。これはどういう……」

「伝えておいたはずだ。貴様が来なければ他の奴が代わりになると……それが遊城十代だったというわけだ」

俺が来る短時間で、か。近くには万丈目がいるが、ヤツの言葉から万丈目は十代に負けたいらしい。仮にもブルートップのエリートと呼ばれる万丈目に勝った十代が負けるとは……。

「さて、ここに来たということは我にデッキを差し出す覚悟ができたということだな」

「そんな覚悟なんてしてないよ。で、呼んだってことは」

「デュエルだ。貴様のデッキを賭けたアンティデュエルだ」

ということは十代はアンティを受けたってことか。ここで俺がやることは決まったかな、逃げられそうにないし。それに、アカデミアで初めての友達だし、十代とは今度デュエルする約束してるんだ。それなのにデッキが盗られちゃ出来ないしな。

「なら、お前は十代のデッキを賭けろ！ 取り返してやる」

「ハッ、我が負けるはずもないがよからう。貴様には先ほど得た遊城十代のデッキを賭けてやろう」

態度がデカすぎる。アイツ……丸藤翔壺のデッキの中身は知らないけど、メインを持ってきてよかった。

『デュエルっ！』

互いにデュエルディスクを構えて叫ぶ。絶対に十代のデッキを取り返してやる！

## TURN-03【アカデミアで出来た友達 後編】

『デュエルっ！』

今日知り合ったばかりの勝利君が翔壱兄さんと向かい合ってデュエルを始めた。翔壱兄さんは見たことも聞いたこともないモンスターと召喚方法で兄貴を倒しちゃった。僕だけが知らないなら勉強不足だと思えるっすけど、同じく今日知り合った明日香さんも知らないみたいだった。

「大丈夫かしらね、あの子」

「ああ。あの白いドラゴンを出されたら危ないだろうな」

「兄貴とのデュエルで出てきたモンスターっすね」

兄貴と明日香さんが勝利君を心配そうに見ている。僕は正直言っただけで翔壱兄さんに勝てるとは思えないよ。兄貴が手も足も出なかったから。

「まずは私のターン、ドロー！」

先行は翔壱さんからみたいだ。無茶でもお願いっス、兄貴のデッキを取り返して欲しいっス。頑張れ、勝利君！

☆↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓★

「私は……手札からレベル・ステイラーを捨てクイック・シンクロンを特殊召喚する！」

「なんだってっ!？」

丸藤翔壱の行動にあの子が驚いている。手札を捨てて特殊召喚するモンスターくらいで驚くなんて、ラィエローとは思えないわね。いえ、何か引つかかる。何に引つかかっているのか分からずモヤモヤとした気持ちになるけど、デュエルはそんな私を置いてどんどん進んでいく。

「そして墓地のレベル・ステイラーの効果。フィールドのクイック・シンクロンのレベルを1つ下げて墓地から特殊召喚！ レベル



1のレベル・ステイラーにレベル4のクイック・シンクロンでチユーニング！」

来たわね。十代とのデュエルで出てきたシンクロモンスター。1ターン目から来るなんて……十代とのデュエルだとそれなりのターンが経過してからだったのに。あの子も運が無いわね。

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！ シンクロ召喚！ いでよ、ジャンク・ウォリアー！」

飛行機のエンジンのような物を背負った青い戦士がフィールドに現れる。どう見ても機械族に見えるんだけど、それでも戦士族なのよね。

「さらに手札からジャンク・シンクロンを召喚し、モンスター効果発動！ 墓地に存在するレベル2以下のモンスターを効果を無効にして表側守備表示で特殊召喚！」

「ああっ！？ 兄貴が負けた展開と同じだ」

今度はジャンク・ウォリアーに似た小さな茶色のモンスターが召喚される。翔君が叫んだ通り十代の敗因となったモンスターが召喚された流れとほとんど同じだった。

「出るか、スターダスト・ドラゴンっ!？」

「……そうね」

十代は拳を握り締めながら食い入るようにフィールドを見つめる。そうよね、あなたの大事なデッキを奪われたのだから。でも、私たちの予想は外れた。

「レベル5のジャンク・ウォリアーにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！ 王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！ シンクロ召喚！ 我が魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

丸藤翔壺が召喚したのはスターダスト・ドラゴンではなく、悪魔のような赤いドラゴン。攻撃力3000の上級モンスターだった。

「スターダスト・ドラゴンじゃないっ!？」

「別のシンクロモンスターっすかつ!？」

「まだいたのね。しかも、攻撃力3000のモンスターがいきなり1ターン目から召喚されるなんて……」

それにきつとあの赤いドラゴン……レッド・デーモンズ・ドラゴンにも特殊な効果があるはず。あの子はどうやって切り抜けるのかしら? 私が気になってあの子を見ればシンクロ召喚なんて未知の召喚方法を使われたにも関わらず、ジッと静かに赤いドラゴンを見つめていた。

その様子にまたも言い知れないモヤモヤとした気持ちを抱く。なに、なんなのこの感じは。

「フハハハハハ、我は2枚カードを伏せターンエンドだ! 我の圧勝は決まりきっているが、サレンダーしてもよいのだぞ? まあ、貴様のデッキは当然貰うがな」

「誰がするか! 俺のターン、ドロー!」

抱いたよく分からない気持ちに私は戸惑う。もう、なんなのよ、この感じは！ 考えてもまったく分からないことに戸惑いから苛立ちに変わるも、デュエルはあの子のターンになった。

「俺は手札から暗黒界の龍神 グラファを墓地に捨てトレード・インを発動！ 俺は2枚ドロー！」

暗黒界？ 聞いたことのない言葉ね。でも、トレード・インは確かレベル8のモンスターを墓地に捨てることで2枚ドローするカードね。

「暗黒界デッキか。だが、グラファの攻撃力は2700。ダークゾーンを使ったところで我が何の対策もしていないとは思っているのか？」

丸藤翔壺は知っているみたいね。暗黒界デッキと言うからにはシリーズ物のようだけど。でも、丸藤翔壺が知っていて、私は知らないなんてなんか嫌ね。もっと広く勉強しなくちゃいけないかもしれないわね。

私が調べるのってほとんどがサイバーガール系列だから、それ以外だと試験で出るかもしれない範囲しか調べないのよね。

「さらに俺は手札抹殺を発動！」

「チイツ、ロード・シンクロンが……」

あら、また手札交換するみたいね。壁になるモンスターはいなかったのかしら？

「俺は5枚捨てて捨てた枚数ドロ！ さらに手札抹殺で捨てられたカードの効果を発動する！ 俺が捨てたのは暗黒界の龍神 グラファに暗黒界の武神 ゴルド。さらに暗黒界の軍神 シルバに暗黒界の狩人 ブラウ、暗黒界の術師 スノウ」

「2枚目のグラファだと!？」

えっ!？ 暗黒界って手札から捨てられると発動する効果だったの!？ あれ、でも、それだけだったらトレード・インで捨てた時にはなんで発動しなかったのかしら？ まだ、なにか条件がある……？

「なんだ、なんだ？　いったいどんな効果があるんだ？」

「十代、少し落ち着きなさい。すぐに彼が効果を言ってくれるんだから」

まったく。十代は忘れてるのかしら？　これはあなたのデッキを取り返すためのデュエルなのに、あの子が使うモンスターの効果にわくわくしちゃって、もう。そんな風に他愛もない話をしている間にもデュエルは進行していく。

「まずグラフアの効果。このカードがカードの効果によって墓地に捨てられた時、相手フィールド上に存在するカードを破壊する。俺は……俺から見て右の伏せカードを破壊！」

「くっ、サイクロンが！？」

グラフアはフィールド上の破壊効果か……それに効果で捨てられた時、だからトレード・インだと発動しなかったわけね。

「あれ、確か最初にグラフアってモンスターを捨ててなかったっス

か？」

「あ、そうだな。なんであの時使わなかったんだ？」

翔君と十代が揃って首を傾げている。仕方ないわね。

「彼に聞いてみないと実際は分からないけど、多分コストで捨てた場合は発動しないんじゃないかしら？　あくまで効果で捨てられる必要があるのよ。トレード・インは手札1枚をコストに発動するカードだから、多分正解だと思うわよ」

「へえ」

「さすがは明日香さんっスね」

アカデミアの過去問に似たような問題があったはずなのだけども……よく受かったわね、2人とも。

「次に暗黒界の武神、軍神の効果。このカードがカードの効果で捨てられた時、墓地から特殊召喚する。そして、ブラウの効果はカードの効果で捨てられた時、1枚ドロ―だ！」

あの子のフィールドに金の斧を持った金色の骨の悪魔と銀の剣を持った銀色の骨の悪魔が召喚される。もう一つの効果はドローだった。やっぱり暗黒界というモンスター達は手札から効果で捨てられると何らかの特殊効果を発動するみたいね。

あのデッキに安易な手札破壊なんてしたらとんでもないことになるわね。

「スノウの効果は他のカードの効果で捨てられた時、デッキから暗黒界と名の付くカードを手札に持ってくる。俺がサーチするのは暗黒界の龍神 グラファだ！」

「3枚目だ、と!?!」

フィールド破壊に蘇生、ドローにサーチって……捨てることさえできればモンスターだけでほとんど出来ちゃうじゃない。

「まだまだあ！ さらに俺は暗黒界の雷を発動！ 相手フィールド上に存在する伏せカードを破壊する！」



魔法カードにも暗黒界と付いているものもあるみたいね。スノウのサーチ範囲に入るだろうから、かなり臨機応変に対応できるわね。しかも、その魔法で破壊したのは聖なるバリア ミラー・フォースだった。

「そして、暗黒界の雷の効果！ このカードが伏せカードを破壊した時、手札からカード1枚を墓地に捨てなければならない！ 俺はグラフアを捨てて、レッド・デーモンズ・ドラゴンを破壊！」

「くっ!？」

普通ならデメリット効果でしかないのに、暗黒界のモンスターだったらメリットに早変わりする。攻撃力3000のモンスターがあっさり破壊されてしまったわ。恐ろしいわね、暗黒界というモンスター達は。

「す、すごいっす！ 上級モンスターをあつという間に倒しちゃったっすよ！」

「すげえ、あいつとデュエルするの楽しみになってきた」

十代はあの子とデュエルしたいと目を輝かせながら決着が付こうとしているデュエルを見ている。まだあの子は通常召喚していないからレベル4以下のモンスターを召喚できれば勝ちが決まる。手札が5枚もあれば事故を起こしていなければ召喚できるでしょ。

「さらに暗黒界の取引を発動。互いのプレイヤーはデッキからカードを1枚ドロし、その後手札を1枚捨てる。俺は暗黒界の尖兵ページを捨て、ページの効果発動！ このカードが他のカードの効果で墓地に捨てられた時、フィールド上に特殊召喚する」

「これだから暗黒界はっ!？」

あの子がレベル4以下のモンスターを特殊召喚した。攻撃力は1600……レベル・ステイラーを簡単に破壊できる。これで勝ちが決まったわね。

「まだ終わりじゃないぞ。俺は墓地に存在する3枚のグラフアの効果を発動！ フィールド上に存在する暗黒界の龍神 グラファ以外の暗黒界と名の付くモンスターを手札に戻すことでグラフアを墓地から特殊召喚だ！」

なんですってっ!？ フィールド上のカードを破壊する効果以外に

自己蘇生持ちなんて……しかも、生贄ではなくて手札に戻すからノ  
ーコストで攻撃力2700の上級モンスターが3体も並ぶなんて、  
なんて悪夢かしら。

「おお、すっげえ。そんな効果まであるのか！」

「ぼ、僕……勝利君とはデュエルしなくなっちゃったっス」

翔君、私もよ。

「さらに俺は暗黒界の門を発動！ 墓地の悪魔族1体を除外して手  
札から悪魔族1体を捨てることができる。俺は暗黒界の導師 セル  
リを捨て、セルリの効果発動！ このカードはカードの効果によっ  
て捨てられた時、相手フィールド上に表側守備表示で特殊召喚する。  
その前に門の効果で1枚ドロロー！」

スノウを除外して丸藤翔壺のフィールドにマントを羽織った青い小  
さな悪魔が特殊召喚される。わざわざ捨ててまで相手のフィールド  
に特殊召喚するなんて……いったいどんな効果があるのかしら？

「な、なにしてるんスカ、勝利君っ!？」

翔君が狼狽えてるけれど、見ていれば分かるはずだから口は挟まないでおく。それにしても暗黒界専用のフィールド魔法であるなんて……墓地のモンスターを除外する必要があるけど、捨てることで効果が発動する暗黒界を捨てる効果にドロまで出来るだなんて。それに墓地にモンスターがいくからコストにも困らないからとても無駄がない。

「さらにセルリの効果発動。このカードが暗黒界と名の付くカードの効果で特殊召喚が成功した時、相手は手札を1枚選択して捨てる。この場合の相手とは丸藤翔壺の相手……つまり俺となる」

おかしいわね。これならフィールド魔法で普通に捨てた方が相手にモンスターを渡さない分有利になるのに。

「俺が選択するのは暗黒界の魔神 レイン！ このカードは相手がコントロールするカードの効果で捨てられた時、墓地から特殊召喚する。特殊召喚に成功した時、相手フィールド上の魔法・罠ゾーンにあるすべてのカードか、モンスターゾーンに存在するすべてのカードかを選択して発動する。俺が選択するのはモンスターゾーンだ！」

もしかしてレインというモンスターだけ相手に捨てさせる必要があるのかしら？ レインだけ相手がコントロールするカードの効果で捨てられた時と、他とは違うみたいだし……レベルは7。扱いは難しいけど効果が使えれば中々に強力ね。

「さらに手札から陽気な葬儀屋を発動。手札にあるモンスターを3枚まで墓地に捨てることができる。俺は暗黒界の武神 ゴルドを捨て特殊召喚！ そして、暗黒界の門はフィールド上に存在する悪魔族モンスターの攻守を300ポイントアップさせる」

あの子、通常召喚を使わずにモンスターゾーンを特殊召喚だけで埋めてしまった。それも後攻1ターン目だけで……暗黒界だからなのか、あの子だからなのか……多分、両方ね。いくらカード1枚1枚が強力でも使うのはデュエリスト。使いこなしているからこそ、暗黒界のモンスター達は存分に力を発揮できているんだわ。

「グラフィア3体、レインとゴルドのダイレクトアタックだ！ 5体の合体攻撃、ダーク・ゲート・カーニバル！」

合計14400のダメージ……そして、10400のオーバーキル。その攻撃の苛烈さに丸藤翔壺は堪えきれずに吹っ飛んでいく。その時に十代のデッキが散らばってしまった。モンスター達が消えるとあの子は丁寧カードを集め、他にカードが落ちてないか確認したあとあの子を睨んでいる丸藤翔壺に目を向けた。

「約束通り返してもらおうからな」

「ぐ、クソっ！」

悔しそうに顔を背ける丸藤翔壺を見ずにあの子はまっすぐ十代に向かいデッキを差し出した。最初、私達はこの子が勝てるなんてあまり期待していなかった。この子が負けた時は私がデュエルで取り返す気でいたくらい。それが蓋を開けてみれば圧勝という結果が入っていたのだから驚きだ。

「すげえな、勝利！　そんでありがとな」

「こっちもムカついたからね。それに珍しく手がよかったからハシヤいでみたんだ……あ、そうだ。ハシヤいでちよいやりすぎちゃってすまん、翔」

「な、なんで勝利君が謝るのさ」

お礼を言う十代に彼は照れくさそうに頬を掻いて、翔君にやり過ぎたことを頭を下げて謝った。翔君の兄弟だから気分を害しただろうという配慮みたいだけど、翔君が慌ててしまっているわね。

「いや、だってあれお前の兄貴だろ。弟に謝るのは変じゃないと思うが？」

「そ、そうなのかな？」

この子、天然なのかしら？ なんの疑問も持たずに主張するものだから翔君が納得しかけてしまってる。でも、翔君は少し考えたあと大きく頭を振った。

「だけど今回ののは翔壺兄さんが悪いんだし、勝利君が謝ることじゃないよ！」

「そう言ってくれど助かるかな」

翔君の言葉にふんわりと安堵するように頬を緩める姿に、あの理不尽なまでの効果でオーバーキルするような子には見えないから不思議

議よね。和やかな空気に私達が浸っているとカッカッカッと音が廊下から響いてきた。これは……まずいっ!?

「ガードマンが来たわ。夜間に出歩いた上に施設の利用がバレたら下手したら退学よ」

「うえっ!?! そうなのか?」

「あなた、生徒手帳を読んでないの? ちゃんと書いてあるわよ」

私がガードマンが来ることを告げると十代が驚いていた。もう、ちゃんと読みなさいよ。ふと横を見ると私を見て驚いているあの子があった。意外ね。この子ならちゃんと読んでも思ったんだけど……。

「君、いたの?」

「気付いてなかったのッ!?!」

あの子の口にした言葉に私は思わず声を荒げてしまったけど、そんなことをしている場合じゃなかったわ。私は十代達を連れてオベリスクブルーのデュエル場から脱出した。





無事に丸藤翔壺から十代のデッキを取り戻した俺は、何故かいたあの時の女の子に連れられて十代と翔の2人と一緒にガードマンに見つかからないように逃げ出した。

「ふう、ここまで来たら安全ね。それにしてもあなた、丸藤翔壺に勝つなんてすごいじゃない」

「今回ののは偶然だよ。引きがとてもよかったから出来たことで……本来ならグラフアで耐えながらキーカードが来るのを待つつもりだったからね。トレード・インで手札抹殺が引けて良かったよ」

女の子に褒められたけど、トレード・インで手札抹殺を引けて本当に運がよかった。レッド・デーモンズに殴り勝てるカードが来るか手札を捨てるカードとカーキかグラフアが手札に揃うまで耐えるつもりだったし。

しかし、なんだ。女の子に褒められたのは初めてだけど、これは照れくさい。

「そうっス。兄貴を倒したモンスターじゃなかったっすけど、攻撃力3000のモンスターを倒したんスから」

俺が照れながら女の子と話していると、翔が興奮しながら喋る。ん？ 十代は違ったのか。

「そういえば十代はどんなモンスターにやられたんだ？ 俺とは違うみたいけど」

「白いドラゴンで、スターダスト・ドラゴン／バスターって名前だったな。勝利が破壊したレッド・デーモンズ・ドラゴンと攻撃力が同じだ。効果がそのモンスターを生贄にする事で魔法、罠、モンスターの効果を無効にして破壊してくるんだ。しかも、そのターンのエンドフェイズに自己蘇生する効果もあって手も足も出なかったぜ」

うわ、よりにもよってスターダスト・ドラゴン／バスターか。あれ、俺嫌いなんだよな。ゲームのCPUにしか使われたことないんだが、出された後は一方的にぼこられて終わったな。対処できるカードは入ってるけど1枚だけだから、中々引けずに攻撃力3000だから戦闘破壊は厳しい。暗黒界は素だと2700が最高だからな。

しかも、戦闘破壊したらスターダストが帰ってくるし、もう最悪。

「最悪だな。まあ、そいつが出てきてもあの手札ならどうにかなったか？ いや、手札抹殺が無効にされてたらちときつかったか下手したら負けてたな。レッド・デーモンズ・ドラゴンで良かったなあ、ほんとに」

いや、トレード・インの時に出てこなかったらまだ大丈夫だったか？ 暗黒界と割れても手札抹殺を使っちゃえばバスター・モードをチェインして連れてきても無効にされるのは恐らくグラファの破壊する効果だろうから除去したのも同然だし……あとはあのまま攻め切れればどうにかなったな。

俺が色々と／バスターの攻略をあの手札状況で考えていると。

「ところでそろそろ帰った方がいいわよ。明日も授業があるんだから」

「え、あ、そうだな。えっと……」

女の子が帰った方がいいと言ってきたので同意したんだけど……女の子の名前を知らなかったため俺は口ごもった。

「天上院明日香よ。好きに呼んでくれていいわ」

「わかった。天上院さんと呼ばせてもらうね、俺は高峰勝利。こっちも好きに呼んでくれていいよ」

俺が口ごもった理由を察した女の子……天上院さんが自己紹介してくれた。女の子の名前を呼ぶのは恥ずかしいから苗字呼びだけど、一応友達になったでいいのかな？ だったらいいな。

「私は勝利と名前で呼ばせてもらうわね」

「いいよ。俺は苗字呼びだけどいいよね？」

っと天上院さんにいきなり名前を呼ばれて恥ずかしくなるが、それを表に出すのも恥ずかしかったので、平静を一生懸命保って対応した。

「ええ、構わないわ」

「それじゃ、十代に翔。また明日な」

でも、それが長く続かないだろうことは自分の事だから当然で逃げるように帰る選択をする。まだ道を覚えてないのでPDAを操作して地図を呼び出す。

「おう、また明日な。約束忘れんなよ」

「おー。天上院さんもおやすみ」

「ええ、おやすみなさい。勝利」

「勝利君、また明日っスー」

十代から返事を貰い、天上院さんとも別れの挨拶を交わしたあと俺は心持ち早足でイエロー寮に帰り着いた。そのあと、初めての女の子の友達が出来たことにニヤケてしまい眠れず、翌日の授業中に寝てしまい先生に怒られてしまった。

## **TURN-03【アカデミアで出来た友達 後編】（後書き）**

シンクロモンスターは十代とオリ主の敵限定で、オリ主に使わせる気はまったくありません。

敵と言っても今話の丸藤翔壱みたいな原作キャラを見下して私生活でも敵対しそうなキャラから、私生活は良好な関係でもデュエルの時は対戦相手という場合もあります。

使って欲しいシンクロモンスターかエクシーズモンスターが居ましたら感想で書いていただければ敵側の切り札として使わせます。ただし、勝敗についての文句は受け付けませんのであしからず。

あとオリジナルカードは無しでお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2048y/>

---

遊戯王GX-お気楽小僧の決闘者生活-

2011年11月15日12時41分発行